

山口県公立大学法人評価委員会（第47回）の審議要旨

- 1 日 時 令和6年3月18日（月） 16:10～17:25
- 2 場 所 山口県立大学北キャンパス3号館3階 C301教室
- 3 出席委員 成富委員長、小野委員、首藤委員、早川委員（委員長以外50音順）
- 4 審議事項 1. 第4期中期計画について
2. 公立大学法人山口県立大学の業務の実績に関する評価の実施要領の一部改正について
- 5 審議要旨 [● 委員 ◆ 委員長 □ 法人 △事務局]

(1) 第4期中期計画について

- 中期計画には、横文字やカタカナが多いという印象を受けた。教育分野に携わっていない方にも分かりやすくしていくという視点で、説明書きを入れるなどの工夫が必要だと思う。
- △ 「英語やカタカナなどの分かりづらい言葉の説明」に関しては、県立大学と相談しながら、用語集などによる対応が取れたらと考えている。
- 入学生に占める県内高校出身者の割合は50%を目指していくということで、これから、新しい計画の中で高大連携が進めば、数字は上がってくるのでしょうし、入試改革では総合型選抜が行われるということなので、県内就職割合と併せて、目標値の50%を超えることを期待している。
- 総合型選抜をやっていくに当たっては、高校で何をやってきて、大学でどう深めていくか、社会にどう貢献していくのかという視点を入試で見えていただければ、高校が探究の時間で実施している地域連携活動の成果が直接入試に結びつき、県立大学に進学することで、学生は大学で企業や官公庁等との地域連携活動を深めることができる。高校生の地元定着につなげていただきたい。
- 附属高校は、3年+4年の7年間で、地域に対して愛情を持つ優秀な子どもを育てたいという思いで創る。探究の教育は、高校で終わるのではなく、大学で引き続き打ち込んで、周防大島高校だけではなく、県内の高校との高大連携をさらに高めていきたいと考えている。

- 地域貢献型大学という点で、地域の企業として、とても有難い大学と思っている。大学の学部構成が、国際、福祉、看護、栄養ということで、一般企業側にとっては、県立大学と接点のある学生の絶対数が少ない気がしている。一般企業への県内就職者を増やすために、今後、学生数を増やしていく予定はあるのか。
- 少子化が進んでいる中で、県内の大学全体のバランスを考えると、現在予定している「情報社会学科（仮称）」の創設でも、総定員は5人程度しか増やしていない。ただ、「情報社会学科」は、一般企業向けの学科なので、今回の国際文化学部の学部再編で、一般企業向けの定員は21人増えることになる。また、社会福祉学部から一般企業に就職する学生向けの教育も大切にしていきたいと考えている。
- いずれにしても、定員増は、子どもの数が減っているため、県内の大学に学生確保の観点で迷惑をかけることもあることから、県立大学としては、他の大学と連携しながら、優秀な人材を一緒に育て、良い人材が山口県で就職していくということで、十分社会貢献ができるのではないかと、役割が果たせるのではないかと考えている。ですので、定員については、増やしていくということは考えていない。
- ◆ 高大連携・接続について、大学から高校生にアピールすれば、高校生が興味を持ってきて、そういう高校生が増えてくると、自分で興味を持って調べてくる生徒も増えてくる。連携の一つ上の接続として、より具体的な考えはあるか。
- 高校生のうちから大学の単位をいくつか取るとか、本学はPBLが得意なので、周防大島高校などの高校と、PBLを使って、地域と繋がりを持ちながら、高大接続というところをやっていきたいと考えている。具体的なカリキュラム等はこれからになるが、単位の先取りは必ずやっていきたいと考えている。
- ◆ 大学教員による高校訪問で、高校生に伝わっていないと感ずることがある。言葉の使い方というのは、大学教員側が高校生に寄り添っていかないといけな。高大連携・接続を推進していくに当たっては、シラバスなどで高校生に何かを説明する際に、高校生が知っている言葉を使うなどの工夫があれば、伝えたいことが伝わりやすくなるのではないかと思う。
- 本学の高大接続部門で4月から実際にカリキュラムを作ったりしていくので、高校の先生方と大学の教員とが一緒にカリキュラムを作っていくことができる。シラバスもそうだが、高校生の気持ちに刺さるようなカリキュラムや仕組みを作りたいと考えている。
- 中期計画素案（前回会議）では、具体的な目標等があまり出てきていなかったように思うが、中期計画（今回会議）は、具体的な目標が示されており、内容が良くなったと受け止めている。また、北キャンパスの1号館の完成により、大学の施設がす

ごく良くなったように、大学DXなどの取組も良くなっていくと期待している。

- 大学の施設は新しくなったが、どれだけ大学に来ていただけるのかは、大学がどう努力するのが、すごく重要だと考えている。我々が地域の人たちを迎えてに行くくらいの気持ちでないと、大学を使ってもらえないと考えているので、しっかり取り組んでまいりたい。
- ◆ PBLの取組に興味のない学生が入学してきた場合、どのように学生と向き合っていくのか。対学生との観点で、何か取り組んで行くような考えはあるか。
- 「やまぐち未来プロジェクト」で、1年生全員が学科の枠を越えて、PBLの取組を行っている。このプロジェクトが重要な役割を果たしていて、1年生の段階で、PBLの重要性をしっかりと認識してもらえるよう、学生にしっかりとインパクトを与えていきたいと考えている。
- 「PBLや専門インターンシップ、アントレプレナーシップ等、地域と連携した取組を行う科目の内容を、毎年すべての学科・研究科で1件以上充実・改善する。」とあるが、取り組むテーマの情報集めや改善プロセスというのは、どのような方法を取られる予定か。
- 大学リーグに関わっているPBLの担当者や本学独自のコーディネーターの活動に加え、本学の教員が地域に出ていく機会を通じて生まれる仕事の中でも、ある程度のPBLを確保できるのではないかと考えている。

また、これまでの実績や、これからの掘り起こし、1号館にお越しいただいた企業の方にもお声がけをしていくという仕掛けなどができると考えていることから、PBLの件数は増やしていきたいと考えている。
- 包括連携を積極的に使っていくこともできると考えている。これまで以上に取組件数は増えていくと考えているが、企業の方の声をしっかりお伺いし、PBLの質を改善する、レベルアップしていくことが重要だと考えている。そこがこれまでと違う点である。
- PBLや専門インターンシップ、アントレプレナーシップ等、地域と連携した取組を行うに当たっては、企業側にもいろいろと思いがあろうから、アンケートなどの実施予定がなくても、企業側の希望が叶えられるようになると良い。
- 学生がキャンパス運営に参画するとあるが、具体的にはどのような参画を想定しているのか。

- 現時点では、具体的なアイデアは固まっていないが、教職員で構成する学内委員会の中に、学生の委員を入れていくことができないかというようなことを考えている。

- 一般に、今頃の学生は、大学との接点が、コロナ禍の影響もあってなくなってしまっている面が強いかなとは思っているが、学生が関わりやすいところから始めていきたいと考えている。学生は、大学との共感が得られれば、けっこうしっかり参画してくれる。

- 県立大学の卒業生を県立大学のPRのために、上手に活用できないだろうか。企業側にとっても、入社してきた卒業生と大学が繋がれば、次の人材確保等につながるメリットがあると思うが、どのようにお考えでしょうか。

- 入試広報では、卒業生だけの紹介パンフレットを作ろうと検討しており、地元で活躍している姿を見せていければと考えている。高校の方からも卒業生がどのような場面で活躍しているのか知りたいとの要望があった。卒業生や企業の方々に、御協力をお願いすることになるかもしれないので、そうした取組も含めて繋がりを作っていき、県内定着に繋げていきたいと考えている。

- そのようなかたちで繋がっていけば、卒業生が後輩を引っ張って一緒に働こうと繋がっていくし、そういった場に企業側も混ぜていくと、非常に有意義な取組になるのではないかと思う。

【 まとめ 】

- ◆ 第4期中期計画の認可を適当と認める。

(2) 公立大学法人山口県立大学の業務の実績に関する評価の実施要領の一部改正について

- 法改正に対応するため、実施要領の一部改正により、年度評価を廃止することに異議はない。

【 まとめ 】

- ◆ 実施要領の一部改正により、「年度評価」を廃止することを適当と認める。

以 上